

# 菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（七）——

焼山廣志

一

前回①に引き続き、本稿では以下の『菅家後集』の作品の全注釈を試みたい。今回は調査・考察を済ませた『菅家後集』「491 聴寺鐘」「495 梅花」「498 山僧贈杖、有感題之」の三首を取り挙げてみる。  
注釈を進める上での「凡例」は前稿①のそれに倣う。

二

本文

平仄

491 聴寺鐘<sup>※</sup> 二月十七日<sup>※</sup>

欲識槌鐘報五更<sup>※</sup>

三塗八難一時驚

●●○○●●●●  
○○●●●○○○

大奇春夏秋冬盡<sup>※</sup>  
爲我終無拔苦聲

○○○○●●●●●●

\*脚韻は下平声庚韻。韻字は「更」「驚」「聲」

校異

○題字「聴寺鐘」…聴寺鐘聲（内二）（尊二）（尊四）（松平）

…聴鐘聲（太二）（太二）（大島）刊本

全本

○題字下「二月十七日」…ナシ（尊二）（尊四）（内二）（大島）

（太二）（太二）（松平）刊本

全本

▼頭注「鐘聲作寺鐘」下有二月十七日五字分注

…（大島）

○槌（○）…槌（○）（大島）（太二）（太二）刊本 全本

○鐘（○）…風（○）（大島）（太二）（太二）刊本 全本

▼頭注「風作鐘」…（大島）

▼右傍注「風イ」：(尊一)(尊二)

○大(○)：太(●)(大島)(太一)(太二) 刊本 全本

▼頭注「太作大」：(大島)

### 訓読

・識らんと欲す 鐘を搥ちて五更を報ずれば

・三塗八難 一時に驚く

・大いに奇しむ 春夏秋冬盡きても

・我が為に 終に抜苦びやくの聲なし

### 通釈

・未明になる仏名会の勤行の曉鐘の音は

・三塗八難、仏の法も届かない闇黒の悪道の果てまでも一時に

震撼させ、夢から覚醒させると言われたが

・それが本当かどうか、はなはだ疑問に思う。(なぜなら) 今

や、一年が終わろうとし、(勤行の鐘の音を聴き続けてきた

のにもかかわらず)

・私ひとりには(すべての衆生がこの勤行で仏、菩薩により苦

しみから救われ、福樂を与えられるという) 抜苦与樂の音が

ひびいてこないからである。

### 語釈

○搥鐘：鐘をうちならすこと。『漢語大詞典』では「②鼓槌」

と説明し、「温庭筠《湖阴詞》の「羽書如電入青瑣、雪腕如搥鼓杖也」の例を挙げる。(大島)(太一)(太二) 刊本 全本にある「槌風」は「風を起こして撞木つづも(つり鐘をつく棒)が鐘を打ちたたたくこと」の意。『菅家文章』「310冬夜九詠―山寺鐘」に「遙送槌風驚客夢、應知感鮫澗中龍」の句が見える。

○五更：一夜を五分した最後の時刻。現在の午前三時から五時まで。また午前四時から六時までとも。寅の刻・戊夜・五声。

『漢語大詞典』では「②旧時自黄昏至拂曉一夜間、分爲甲、乙、丙、丁、戊五段、謂之「五更」又稱五鼓、五夜」③特指第五更的時候。即天將明時」と説明する。ここでは「③」の意。『田氏家集』「12天台夜鐘」に「寺在天台最峻峯、危樓夜打五更鐘」の句が見える。『菅家文章』「39八月十五夕、待月席上各分一字」に「五更待月事何如、物色人情計曾疎」の句が、又「308冬夜九詠―不睡」に「不睡騰々送五更、苦思吾宅在東京」の句が見出せる。

○三塗：(三途)とも書く。地獄・餓鬼・畜生の三悪道のこと、地獄は火に焼かれることから(火途)、畜生は互いに相食あひたむことから(血途)、餓鬼は刀で責められることから(刀途)とい、合わせて火血刀の三途とも称する。(岩波『仏教辞典』三二二頁)『仏教語大辞典』(中村元著 東京書籍)には「①地獄・餓鬼・畜生の三悪道をいう。三つの悪い所。三悪趣。悪業の結果として人びとが行かなければならない所。悪い報いとして堕ちた苦しみにさいなまれる三つの世界。(中略)インドで

つくられた仏典の漢訳では「三塗」と書く。」と説明する。『漢語大詞典』では「①佛教語。即火途（地獄道）血途（畜生道）刀途（餓鬼道）」と説明する。

○八難：①仏を見ず、仏法を聞くことができない境界が八種あるのを用いる。(1)地獄(2)餓鬼(3)畜生（以上三悪道は苦痛が激しいため）(4)長寿天（長寿を楽しんで求道心が起こらない）(5)辺地（ここは楽しみが多すぎる）(6)盲聾瘡癩（感覺器官に欠陥があるため）(7)世智弁聰（世俗智にたけて正理に従わない）(8)仏前仏後（仏が世にましまさぬ時）である。仏や法と無縁な八種のところ。『佛教語大辞典』中村元著 一一〇四頁）

○拔苦：苦しみから救うこと。助けること。

【拔苦與樂】仏、菩薩が衆生を苦しみから救い、福樂を与えるということ。慈悲のうち前者が〈悲〉にあたり後者が〈慈〉に相当すると解釈される。『大智度論』27に「大慈与一切衆生樂、大悲拔一切衆生苦」の句が見える。仏教の基本的構造は、この苦しみの生存を解決して至福の境地に達することであるから、この言葉は〈厭離穢土・欣求淨土〉という言葉とともにその基本的構造を端的に表現したものと考えることが出来る。

（岩波『仏教辞典』六六三頁）

『菅家文章』「310冬夜九詠―山寺鐘―」に「草堂深鎖翠煙松、  
拔苦音聲五夜鐘」の句が見える。

### 補説

●詩題「聽寺鐘。二月十七日」について

川口久雄氏は岩波古典文学大系本の補注で「おそらく観世音寺の十二月仏名懺悔会前後のころの鐘の声を早晩に聞いて作ったであろう。題注「二月十七日」は「十二月十七日」の誤脱であろう。」と述べられている『菅家文章・菅家後集』補注四九一（二）七三六頁）が、前述の詩内容、とりわけ三句目の「大奇春夏秋冬盡」の句内容、「今や一年が終わろうとしているのに、合点がいかないのは……」から、川口久雄氏の論じられている「十二月十七日」の誤脱説に肯首する。年内に詠んだ作品である。

●「491聽寺鐘 二月十七日」と類似する詩

### 語釈

の中で既に指摘した所だが、『菅家文章』巻四中に措辞的に酷似した作品がある。

### 310 山寺鐘

草堂深鎖翠煙松 草堂深く鎖す 翠煙の松

拔苦音聲五夜鐘 拔苦の音聲 五夜の鐘

遙送槌風驚客夢 遙かに槌風を送りて 客夢を驚す

應知感鯨澗中龍 知るべし 鯨と澗中の龍とを感ばしむるこ

とを

（岩波古典文学大系本より本文・訓引用）

(傍線 筆者)

傍線を付した詩語は「491聴寺鐘」との類似同一語句である。

この作品は「冬夜九詠」九首連作中の三作目にあたる。讃岐守時代、道真四十五歳時のものと考えられる。冬の夜、眠れぬ徒れに詠んだもので、山寺の鐘の音の響きが夜のしじまの沈黙を破る一瞬を描写した。闇の中に広がる音響の広がり強く印象づける詩内容となっている。自然と一体化した道具の心情を説き取ることが出来る。それに比して「491聴寺鐘」では酷似した詩句を使いながら詩情に大きな隔りがあることに気付く。換言するならば詩情の緊迫感が全く異なるのである。「310山寺鐘」に言う「五夜鐘」は「客夢」を醒まさせるの対し「491聴寺鐘」では「三塗八難」を覚醒させると詠む。そしてそれほどの効用のある鐘の音でもってしても自分の今の状況を変えるには無力であることを切実にうたう。そこに讃岐守時代と大宰府謫居時代の道真の心情、それが酷似した措辞による作品であるだけに余計に差異がきわだつ。

三

本文

平仄

495 梅花

宣風坊北新栽處ト

○○○●○○○●

仁壽殿西内宴時ト

○○●○○●●◎

人は同人梅異樹

○○●○○●●●

知花獨笑ト我多悲

○○●●●○○◎

\*脚韻は上平声支韻、韻字は「時」「悲」である。

校異

○題字下注「七言」：(内二)(尊四)(大島)(太二)(松平)

刊本 全本

○處(●)：処(●)(内二)

○内(●)：曲(●)(内二)(尊四)(大島)(加越)(太二)

(松平) 刊本 全本

▼傍注「鎌倉本作内」：(大島)(太二) 刊本 全本

○笑(●)：咲(●)(内二)(尊二)(尊四)(松平)

訓読

・宣風坊の北 新に栽トうる處

・仁壽殿の西 内宴の時

・人は是れ同人 梅は異なる樹

・知りぬ 花のみ獨り笑みて、我は悲しみの多きを

通釈

・(私は以前)自宅のある京都の宣風坊の北の地に、新たに一株の梅を植えそれを愛でていた(のが、この時期だったし)

・仁寿殿の西側に植えてあつた紅梅を賞翫する内宴に参列した（のち、この今の時期であつた）

・その梅の花を見る者は同じなのに、この太宰府で見る梅の花と以前見てきた梅の花とは同一ではない。

・梅の花だけは昔と変わらずひとり咲き新春を満喫しているが、私にとってはこの期を迎えるのは一層、悲しみを増長させるだけの事である。

### 語釈

○宣風坊北：五条坊門北。道真の邸宅のあつた所。『書斎記』の中で「東京宣風坊有一家」の一文が見える。大曾根章介氏はこの一文を次のように説明されている。<sup>2)</sup>

菅原氏の邸宅は紅梅殿と呼ばれ、『拾芥抄』に「五条坊門北、町面」とあり、西洞院・五条坊門・町尻・綾小路に囲まれてゐる。『枕草子』（二十二段）の邸宅を列挙した中に紅梅の名があり、別に菅原の院もあつて両者の区別がはつきりしない。『拾芥抄』の東京図によると、紅梅殿の南五条坊門を隔てて天神御所があり、菅原の院はこれを指すのかも知れぬ。紅梅殿の名は道真が左遷の時筑紫に出発するに當つて「東風吹かば」の和歌を詠んだ邸で、中世の飛梅伝説と結びついて有名になつたものである。

### ↓補説 参照。

道真の作品中には他にも「360假中書懷詩」に「假中何處宿、

宣風坊下家」の用例が、又「447勸前進士山風 種庭樹」に「宣風坊下腐儒家、欲待春來快見花」の例が見える。

○仁壽殿：平安宮内裏殿舎の一つ。内裏の中央にあるので中殿、清涼殿の東にあたるので東殿ともいう。もと天皇の常の座所であつたが、のち常の座所は清涼殿となり、ここでは内宴、相撲、御遊などが行なわれた。『日本語大辞典』川口久雄氏は岩波古典文学大系本の補注で

「仁壽殿」は紫宸殿のすぐ北に連なり、呉竹の小庭を隔てて西の方清涼殿と相對する。その小庭の北仁壽殿の西に紅梅があつたことは『拾芥抄』巻中の附録、内裏指図に見える。と説明されている。<sup>3)</sup>

○内宴：平安時代正月二十一日頃の子の日に帝が通常仁壽殿に出御して公卿以下文人などを召して行なう内々の宴。題を賜つて漢詩や漢文を作り、御前に講ずるほか管弦なども行なわれた。『文徳実録・仁寿二年正月己丑』「帝觴于近臣、命樂賦詩。（略）此復弘仁遺美所謂内宴者也」『日本語大辞典』

▼異本の「曲宴」は「うちとけた宴会」のことを指す。帝が臣下にたまわる小規模な宴会「曲」は「小」の意。対義語は「大宴」。花の宴、月の宴の類。「日本後紀・延暦十五年十一月戊子」曲宴、賜待臣已上被。「三代実録・貞観九年三月壬子」天皇曲宴太后於常寧殿、天皇称觴奉寿、申之藤語、自且訖暮、極歡而罷。

○獨笑：ひとり笑む。『蜀志』「譙周傳」に「誦讀典籍、欣然獨

笑、以忘寢食」の例が見える。『漢語大詞典』には「独自喜笑、自樂」と説明し、「李白・九日詩」の「窺觴照歡顏、獨笑還自傾」の用例を引く。ここでは「(花が)咲くこと」「(花が)ほころぶこと」をさす。「笑」を異本では「咲」とするが、詩内容から「笑」とすべき所。この道真の詩句に投影を指摘することの出来る作品が『凌雲集』中に見出せる。↓ **補説** 参照。

### 補説

●一句目「宣風坊北新栽處」について

前述の **語釈** の項で触れた所だが、道真の『書齋記』の中に次のような一文がある。

東京宣風坊有一家。《中略》戸前近側、有一株梅。東去數歩、有數竿竹。每至花時、每當風便、可以優暢情性、可以長養精神。(東京の宣風坊に一家有り。《中略》戸前の近き側に、一株の梅有り。東に去ること數歩、數竿の竹有り。花時に至る毎に、風の便に當る毎に、以て情性を優暢すべし、以て精神を長養すべし) (傍線筆者)

●四句目「知花獨笑我多悲」の表現について

前述の **語釈** の項で触れた所だが、『凌雲集』にこの道真

の作品への投影を指摘できる次のような詩が見える。

19 和進士貞主初春過菅祭酒舊宅悵然傷懷簡布巨・藤三秀才作一絶(進士貞主が「初春菅祭酒が旧宅に過りて悵然に傷懷し・布瑠・巨勢・藤原の三秀才に簡するの作」に和す、一絶)

書閣閉來冬變春 書閣閉ぢてより冬の春に變り

梅花獨笑向啼人 梅花独り笑みて啼人に向かふ

雖知世上必然理 世上必然の理を知ると雖も

猶恨門前斷舊賓 猶し恨めし門前に旧賓の断ゆるといふこと

は

(小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』

P 1467 ~ P 1469) (傍線筆者)

以下、小島憲之氏の詳細な考察の一文を引用しながら道真の「495 梅花」との比較を試みたい。

まずこの『凌雲集』の作品は、小島憲之氏の考察によると「文章生滋野貞主の(初春一月、大学頭菅原清公の旧宅に立ち寄ったところ(その荒廢した有様をみて)心にいたみ悲しみ、布瑠・巨勢志貴人・藤原の三秀才にその悲しみの心を書いて贈った詩)に唱和した御製(嵯峨天皇御作・筆者注)」とある。<sup>4)</sup>

句意は、小島憲之氏の一文を引くと、

「菅原家の」書殿が閉鎖されて以来、冬も過ぎて春になった

(その庭の) 梅の花だけが咲いて、(ここに立ち寄って旧時を思ひつ) 嘆く人に相對する(相對してほころぶ)。「昔を偲んで泣く作者に向かつて、梅の花だけひとり淋しく咲きかかるわびしい風景。

「移り変りの行なはれると云ふ」世間の必然の道理をよく承知してゐるとは云ふものの、やはり(盛時とは違つて)門の前にふるなじみの賓客が絶えたのは恨めしいことだ。」

筆者はこの詩の二句目「梅花獨笑向啼人」の表現に殊更注目してみたいと思う。小島憲之氏はこの二句目についても以下のような傾聴すべき注釈を公にされている。

「笑」は綻び咲くこと。唐太宗の「笑樹花分色、啼枝鳥合声」(月晦)はその一例。「啼人」は泣く人、用例未だ検出し得ない。「啼」は一般に鳥類の鳴く場合のほか、人の泣く場合にも用ゐることば。(中略)「笑む」即ち「笑く」梅の花に対して、昔を偲んで「啼く」(泣く)人を同じ句の中にもたらしした趣向。なほこの第二句は「梅花啼人に向かひて独り笑む(笑く)」の意。盛唐劉長卿の「江花獨向北人愁」(初聞貶謫 読喜量移登于越亭 贈校書)の類句がある。

この『凌雲集』の作品は前述の小島憲之氏の論述にあるように、道真の祖父にあたる菅原清公の書閣の荒廢をいたむ滋野貞

主の詩に唱和した嵯峨天皇の御製である。この詩の表現、とりわけ二句目のそれを道真が諳んじていて自作に投影させたことは想像に難くない。

とすれば、道真の四句目「知花獨笑我多悲」の表現を『凌雲集』のそれと並べてみると、「花獨笑」と「我多悲」が対をなしている表現であることがはっきりする。異本で「花獨笑」が「花獨咲」とあるのは、意味上では同様のものだが、この『凌雲集』からの投影関係の視点で考えると「我多悲」の対であるならば「笑」でなければならないことがわかる。

#### 四

#### 本文

#### 平仄

498 山僧贈杖、有感題之

昔思靈壽助衰羸	●	○○	●●	○○	◎
豈料樵翁古木枝	●	○○	○○	●●	◎
節目含將空送老	●	○○	○○	●●	◎
刀痕削著半留皮	○○	●●	●●	○○	◎
扶持無處遊花月	○○	○○	●●	○○	◎
拋棄有時倚竹籬	○○	●●	●●	◎	
万一開眉何事在	●●	○○	○○	●●	◎

暫爲馬被小兒騎

●○○●○○◎

\*脚韻は上平声 支韻 題字は「羸」「枝」「皮」「籬」「騎」

### 校異

○有感題之：有感題（尊二）

▼頭字下「七言」：（尊四）（内一）（大島）（太二）（松平）

刊本 全本

▼頭注「扶十」：（尊四）（内一）（松平）

▼頭注「無七言二字」：（大島）

○料（●）：析（内一）

### 訓読

・昔は思ふ 靈壽れいじゆの衰羸すいゐを助けんことを

・豈あた、樵翁 古木の枝を料はからんや

・節目含みもちて 空しく老を送る

・刀痕削り著けて 半なかに皮を留む

・扶持しては 花月に遊ぶ處無し

・抛なげ棄すてては 時有りて竹籬たけのすゝに倚よす

・万一、眉開かば、何の事か有る

・暫く馬と為りて小兒に騎られん

### 通釈

・昔、私は年をとり杖が必要になった時は、靈寿木が疲れ弱つ

た体を支えてくれるだろうと考えていた。

・それが、きこりが手にするような古木の枝を杖がわりにしようなどとは思ったことがあるだろうか。（今、山僧からもらった杖がなんとこの古木なのである）

・節目があつて、いたずらに朽ちた木なのである。

・又、刀で削ったあとが残っていて木そのものに樹皮もついたままのようなしろものである。

・（それとて外に出歩く気があれば杖として役立ちもしようが）今の私には老体を杖で支えて、外物をめぐる気持ちも、又そうした風光明媚な所とて一つもない。

・この古木を投げすてて、竹のまがきに立てかけておく以外に役立ちそうにもない。

・ただ、わずかでもこの古木が、人に有益で楽しみをもたらすとすれば、何が考えられるだろうか。（何であろうか）

・それは、一時の竹馬がわりとなつて、子供に乘られる遊戯の効であろう。

### 語釈

○山僧：山寺の僧、「王昌齡・送東林簾上人歸廬山詩」に「日暮東林下、山僧還獨歸」の句が、「李白・秋浦歌」に「聞與山僧別、低頭禮白雲」の句がみえる。川口久雄氏は岩波古典文学大系本の頭注で、「この山僧は、四九七の菊苗を頒ち与えた僧と同人であろうか。」と述べておられる。<sup>⑤</sup>



○靈壽：○樹木の名・一名、椴。杖や鞭を作るのに用いる。靈壽木、『山海經』『海内經』に「靈壽實華（注）靈壽木似竹、有枝節」の【靈壽木】『本草』【靈壽木】に「集解、時珍曰、陸氏詩疏云、椴即椴也、節中腫似扶老即今靈壽也、人以作杖及馬鞭弘農郡北山有之」とある。『漢語大詞典』には「○木名即『椴』と説明し『漢書』『孔光傳』の「賜太師靈壽杖、顔師古注、木似竹有枝節、長不過八九尺、圍三四寸、自然有合杖制、不須削治也」の用例、及び『文選』「左思・蜀都賦」の「靈壽桃枝。注靈壽、木名也、出涪陵縣、桃枝、竹屬也、出墊江縣。二者可以為杖」を引く。『菅家文草』「40九日侍宴、賦山人獻葉黃杖、應製」に「靈壽應慙恩賜孔、葛陵欲謝化為龍」の用例が見える。

○衰弱：おとろえ弱る。「羸」は疲れ弱ること。『漢語大詞典』では「衰老瘦弱」と説明し、『東觀漢記』「張敏傳」の「令君所苦未瘳、有司奏君年體衰羸、郊廟禮儀仍有曠廢」の例を引く。『白氏文集』「230秋遊平泉贈韋處士間禪師」に「今來已及此、猶未苦衰羸」の用例が見える。

○樵翁：きこりの翁・樵叟。『漢語大詞典』では「打柴的老翁」と説明し、「唐馬戴・山行偶作詩」の「綠危路忽窮、投宿值樵翁」の例を挙げる。『菅家文草』「162秋山」に「樵翁論去道、巖客問來由」の句が、又「374遊龍門寺」に「樵翁莫笑歸家客、王事營々罷不能」の句が見える。

○古木……ふるい樹。年数を経た木。老樹。

「魏徵・述懷詩」に「古木鳴寒鳥、空山啼夜猿」の句が、「李

賀・得日觀東房詩」に「古木疑捧月、危峯欲墮江」の句が見える。

○節目：木理の精剛なところ。木のふしめ。

『礼記』「学記」に「善問者如攻堅木、先其易者、後其節目。」（注）節、則木理之剛、目、則木理之精」の用例が見える。『呂覽』「筭難」に「尺之木必有節目、寸之玉必有瑕璫」の用例が見える。『白氏文集』「060文柏林」に「刮削露節目、拂拭生輝光」の句がある。

○將：『助字』もちて。ゆきて。（動詞の後につけて動作が一定の方向に進む様態を表す）「白居易・亮炭翁」に「宮使驅將惜不得」の例がそれである。『漢辞海』

○送老：老後の時日を消遣する。『白氏文集』「香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁詩」に「司馬仍為送老官」の用例が、又「杜甫・秦州雜詩」に「何時一茅屋、送老白雲辺」の例が見える。『菅家文草』「167釣船」に「不問歸家後、唯期送老中」の句が、又「414圍碁」に「偷閑猶氣味、送老不蹉跎」の句が見える。○刀痕：刀のきざあと。刀癢。『漢語大詞典』には「刀傷留下癢痕」と説明し、「漢蔡琰・枯胡笳十八拍」の「塞上黃蒿兮枝枯葉乾、沙場白骨兮刀痕箭瘢」の例を引く。

○著：『助字』動詞の後に置かれて動作の進行や完成を示す。『白氏文集』「邯鄲冬至夜思家」の「還応説著遠行人」の例が、それである。『漢辞海』

○扶持：たすけもつ。扶護。扶助。扶將。『孟子』「滕文公上」

に「守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦。」(注) 扶持其羸弱、救其困急」の例が見える。『漢語大詞典』では「②支持、帮助」と説明し、『管子』「形勢解」の「道者扶持衆物、使得生育、而各終其性命者也」の例を引く。『菅家文集』「360假中書懷詩」に「早起呼童子、扶持殘菊花」の句が見え、『菅家後集』「490雪夜思家竹」に「縱不得扶持、其奈後凋節」の句が、又、「504官舎幽趣」に「依病扶持藜舊杖、忘愁吟詠菊殘花」の句が見える。

○花月…花と月。又花に照る月。花に映じる月。「賈至・送王道士還京詩」に「借問清都舊花月、豈知遷客泣瀟湘」の用例がある。『漢語大詞典』では「花和月・泛指美好的景色」と説明し、「王勃・山扉夜坐詩」の「林塘花月下、別似一家春」の用例及び「李白・襄陽曲之一」の「江城回渌水、花月使人迷」の句を引く。『白氏文集』「288和微之十七與君別及囑月花枝之詠」に「垂老休吟花月句、恐君更結後身緣」の句が見える。『田氏家集』「31三月晦日、送春感題」にも「壯年未取歡情盡、花月徒勞世累長」の句が見える。

○拋棄…なげすてる。ふりすてる。拋擲。

○竹籬…竹で作ったまがき。『白氏文集』「297秋池獨泛」に「蕭疎秋竹籬、清淺秋風池」の句が、又「323新亭病後獨坐、招李侍郎公垂」に「趁暖泥茶竈、防寒夾竹籬」の句がある。又『菅家文集』「196秋」に「老松窓下風涼處、疎竹籬頭月落時」の句が、又「402竹」に「翠竹疎籬下、脩々翫碧鮮」の句が見える。

○開眉…眉をひらく。愁をとく。安心する。『漢語大詞典』に

は「笑・開顏」と説明し、『白氏文集』「偶作寄朗之詩」の「岐分兩迴首、書到一開眉」の用例を引く。『白氏文集』には他に「281鏡換杯」に「不似杜康神用速、十分一盞便開眉」の句が、<sup>2639</sup>聞新蟬贈劉二十八」に「無過一杯酒、相勸數開眉」の句が見える。『菅家文集』「405酒」に「開眉杯裏伴、促膝醉中吟」の句が、又『菅家後集』「477詠樂天北窓三友詩」に「不須一曲煩用手、何必十分便開眉」の句が見える。いずれの用例も「酒」が「愁眉を解く」ものであるという発想が前提の使われ方になっている。

○万一…万分の一。わずか。『漢語大詞典』には「①万分之一。表示極少的一部分」と説明する事項が、この句のそれであると考える。一方で「万が一の場合」「もし、ひよっと」の意もある。『漢語大詞典』に「②指可能性極小的意外的情況」「③連詞。表示可能性極小的假設」と説明する用法は、ここでは採らない。

#### 補説

○何事…どんな事。どのような事。「何」は名詞の修飾語として用いられる。「なん」「なんノ」「いざレノ」と読み「どのよう」な「どの」「いつの」といった意味を表す。『漢辞海』『漢語大詞典』には「①什麼事。哪件事」と説明する用法と考えられる。

#### 補説

●詩題「山僧贈杖、有感題之」の「山僧」について

川口久雄氏は岩波古典文学大系本の頭注で「この山僧は、四九七の菊苗を頒ち与えた僧と同人であろうか。杖を贈られても心から喜ぶ気になれないのである。」と述べられている。

●七・八句「万一開眉何事在、暫爲馬被小兒騎」の解釈について

川口久雄氏は岩波古典文学大系本の頭注でこの二句の解釈を「万に一つ、(赦免されるようなことがあって)憂えの眉ものびひらくようなことがあったらどんなことになるであろう。このおかしな杖も一役買つて竹馬の代わりとなつて小兒に乗られるようなものを」とされている。この解釈は七句目の「万一」を「万が一の場合」「もし、ひよつとして」の意として採られた上でのそれである。筆者はこの「万一」を前の**語釈**の項で触れたように「わずか」「ほんの少し」の意で考えてみた。その根拠を以下に述べてみる。

その一は、この七・八句が受けるそれまでの句内容とのつながりである。まず一・二句で、自分が年老いて杖の助けを求めなければならなくなつたら、その杖は霊寿木だと思つていたのに、今回僧からもらった古木の杖はそれと余りにかけ離れた材質のものだった。と詠い、三・四句でその古木の杖の様を詠う。先に引いたように、こゝでは川口久雄氏の言及されている「杖

を贈られても心から喜ぶ気になれない」心情が露呈している句意となつている。ところが、五・六句を読み解くとそれは、僧からもらった古木の杖にいらだつていゝのではなく、五句目に言う「それとて外に出歩く気がすれば杖として役立ちもしようが」今の私には老体を杖で支えて外物をめぐる気持ちも、又そうした風光明媚な所として一つもない」と、自分自身の身体、心情にいらだつていゝことが判明する。故に六句目で「この古木を投げすてて竹のまがきに立てかけておく」と詠むのである。せっかく山僧から贈られた杖がいかに自分の求めるそれと隔絶していたとしても、気に入らないからと言つて不用として投げ捨てるには礼に失ずると思つたからこそ七・八句でそれを受けて「この古木の杖が、外に出る気もない私には不用でも、何か他の人に**わずか**でも役に立つとしたら子供達の竹馬の代用になるはず」と詠んでいるものと考ええる。とすれば、「万一」は「開眉」を修飾する語で「わずか」「ほんの少し」の意でとるべきではないだろうか。

二点目は「開眉」の詩語としての使われ方である。既に**語釈**の項で触れたように中国の古典籍、とりわけ白詩に散見する語であるが、いずれの詩も「酒」「飲酒」と対で使われている。この用法を道真は自作にも忠実に生かしていることは用例にも指摘した。特に『菅家後集』「477詠樂天北窓三友詩」の例は、「酒」が自分を「開眉」するものではないと暗に「酒」を「開眉」の語に込めている使い方である。こうした流れでこ

の四九八の七句目を考えると、「酒が人の愁いを解き放つてくれるように、この僧がくれた古木が、人に役立つとしたら」の解釈に落ちつくのではないかと考える。「開眉」するものが「酒」という詩語の使われ方として定着しているが故に、それを「古木」に置き換えた時、「開眉」を修飾するものとして「万一」わずか、ほんの少し」を付す必然性が生じたのではないだろうか。

追記

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大の御助力をいただいた。とりわけ語釈・白詩中の詩語の検索等にお力添えをいただいた事に深謝申し上げたい。

二〇〇二年 十一月二十九日執筆了  
(やきやま ひろし／大学院七回修了・有明高専)

【注】

- (1) 拙稿「菅原道真研究『菅家後集』全注釈(六)」  
(「有明工業高等専門学校紀要」三十九号)
- (2) 大曾根章介著『王朝漢文論攷―『本朝文粹』の研究―』  
作品論七「書齋記」雑考 一八四頁
- (3) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』  
頭注五一頁・補注七三七頁
- (4) 小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』 一四六七頁
- (5) 小島憲之著『國風暗黒時代の文學中(中)』 一四六九・一四七〇頁
- (6) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』  
頭注 五一三頁
- (7) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』  
頭注七・八 五一三頁